

にして、それぞれ感じたままを記録にとどめた。

生き地獄から戻った私！

東京都 苗村 富子

一 渡満までのこと

私は大正九（一九二〇）年に、当時の滋賀県大津市の滋賀里在の一農山村の農家に生まれ、両親と兄弟妹たちの温かい庇護のもとに、貧乏ながら平穏な毎日を過ごしていました。生まれてしばらくすると、この地方にも初めて電灯がとまり、それまでの薄暗い石油ランプの明るさから、裸電球の中の赤いフィラメントの光に、新しい生活が生まれてきたことを強く感じて、とても印象的だったことを昨日のことに思い出します。

当時の日本は、大正中期から昭和の初期にかけて、世界中を震撼させた「世界金融大恐慌」の影響を受けて、後に「昭和の大恐慌」と言われる大

不況の波に洗われていました。

そのころの世情を端的に表していて日本中の人々の涙を誘った、『女工哀史』に書かれている通りの世でした。

そのうえに、昭和三（一九二八）、四年ごろになると東北地方から北陸地方に及ぶ広い範囲で、冷害が続くという天災にも見舞われて、農作物の収穫が無く、特に農村では「今日食べる物も無い」という悲惨な生活をするようになり、貧乏もどん底という時代となりました。

農村の二、三男は、働きたくとも働く場所がなく、耕すにも耕す土地が無いという有様で、あちこちで土地に起因する骨肉の争いが起きていました。

また、製糸工場などに働きに出ている娘たちも、製糸工場の軒並みの倒産廃業により、雀の涙ほどの手切れ金で解雇されてしまい、やむを得ずに故郷に戻り、東北、北陸の農村では、そのような男女があふれていて深刻な社会問題をもたらした。

ていました。だんだんと苦しさが増してくると、何とかしてお金を得なければということから、遊郭などに身売りすることが一般的なこととなり、それにまつわる哀れな話も、いろいろと人々の話題になってくる時代でもありました。

このような社会情勢のときに、昭和七年、満州国が建国されましたが、その建国の理念として、「五族協和」「王道楽土の建設」などと叫ばれて、多くの日本人に対しても夢と希望を与えたものでした。

時の政府は、長く続く経済危機から脱出し、主として農村における過剰人口の対策をねらいとし、さらに何よりも重要な、国民の士気高揚のためには、この満州開拓に力を注ぐほかに対策は無いということから、満蒙の地への移民を国の施策として強力に推進することとなりました。

貧困にあえいでいる農村を中心にして、満蒙開拓移民の募集を大々的に始め、「行け満蒙開拓」とか、「鉞とる戦士」とかを旗印にして、満州へ、

満州へと、鐘や太鼓で送り出すようになってきました。生きることので精いっぱいだった農村男子の、特に二男、三男はもとより、都会生活者の中にも、この不況の生活から一日でも早く逃れるために大いに共鳴して、多くの若者が開拓移民となって渡満して行きました。

十五歳から十七歳までの年齢の青少年は、すぐに開拓移民には採用されなかつたので、青少年義勇軍として、茨城県の内原村に設立された満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に、試験を受けて入所しました。

若い独身の農村男性が開拓移民として渡満し、苦労に苦労を重ねて開拓事業に従事していましたが、その人たちも、先行きの生活にもどうにか見通しが付いてくると、独り身ではいろいろと日常生活にも不自由を生じ、大変だろうから世帯を持たせなければならぬということになり、「夫婦で腰を落ち着けての開拓増進」ということが唱えられるようになってきて、今度は「開拓の花嫁」

が必要になり、花嫁募集を開始することになりました。

歌の文句にも、「俺も行くから君も行け、狭い日本にや住みあきた」と歌われるようになり、私もそれを聞いていて、つくづくそうだという思いにかられるようになりました。

当時の開拓花嫁の募集は、一部には直接開拓団員の家族が、適齢期の知り合いの女性か、または縁故者や知人を頼って各個撃破で口説き落として、本人とは直接に見合いをして結ばれるというケースもありましたが、大部分は写真による見合などで相手を決めてしまい、本人同士は結婚式の日に初めて顔を合わせるか、もつとひどいものは、開拓団まで独りで行ってそこで初めて相手の顔を知るといふのも珍しいことではありませんでした。「大陸の花嫁」などと美しい言葉でもてはやされていましたが、実際は「国策の花嫁」という方が適切な表現ではなかったかと思いました。私も、その「国策の花嫁」という道を歩み出し

ました。開拓団員の花嫁となって満州に渡り、開拓に汗を流したいという気持ちがあんだんと高じてきて、本心から熱望するようになってきました。

「どうしても満州に行くのだ！」という思いは、日ごと夜ごとに、まるで熱にうなされているようにつのつていましたが、そのころちょうど、滋賀県庁で花嫁募集が始まりました。それを知った私は、またと無いチャンスとばかりに、「両親に私の決心を打ち明けました。」

父はびつくりして、「女が、どうしてそんなに遠いところに行つて、何になるのだ！　あまり父さんや母さんを心配させるな。だれもが心配するばかりだぞ！」と言って、男泣きして私の決心を引き止めました。その話を聞いた兄弟や親類の人々も、みんな口を合わせたように反対していませんでした。

私は、「許してくれなければ、死んでやる！」と、少し強気を出して、脅し言葉も加えて言いま

した。みんなを随分と困らせていました。両親から、「私の大陸の花嫁としての渡満に賛成する」という言葉をもらわないうちに、私は周りの人々に渡満の実現化を図っていました。

そのころ、私は一般的な花嫁修業のつもりで、学校で和裁を習っていましたが、その教室でもみんなを前にして、開拓の花嫁としての必要な講習を受けていることを話して、「皆さんも！ どんどん私に続いて大陸の花嫁として満州に来てください。私は満州に行つて、一生懸命に働いてお金を貯め、この学校を建て直したいと思つています」と、夢のように大きなことを、つい言つてしまったことを今でも忘れずに覚えています。

そのときの県の花嫁募集に対して、県内からは六十人の志願者がありました。選考の結果は、田中さんという方と私の二人が合格しました。

私の「大陸花嫁」への道は、だんだんと決定付けられてきました。周囲の人も暗黙のうちに了承するようになってきて、出発準備に追われて気ぜ

わしく毎日を過ごしていました。

そんなときに、県庁の担当の方から、「滋賀県としては、若い女性を遠い満州の地まで一人旅をさせることは、ちよつと問題であるということになった。そこで、こちらで結婚式を挙げて、夫婦で開拓地に赴任するようにしたので了解してもらいたい」というお話がありました。

滋賀県からの開拓移民団員は、「満蒙開拓団第六次龍爪開拓団滋賀村（屯）」に入植していましたが、十人のうち、まだ奥さんをもらっていない人が四人いました。その四人が私たち花嫁候補者二人のお見合い相手となる人でした。

県庁の担当者が、その四人の方々の写真を持って来られて、「このうちから選んでください」と言われました。現在ではとてもではなく、考えられないことですが、当時は致し方ないことと思ひ、あまり気にはなりません。それでも、両親も親類の人たちも、さすがにこんな方法での花婿選びには割り切れないものがあつたよう

す。

私は、言われるままに四人の方の写真を眺めながら、あまり深く考えずに苗村を選びました。全く知らない人ですが、同じ村出身ということでも何となく親近感を覚えて、迷うことなく決心をしました。それから、苗村と文通を始めるようになりました。文通が度重なるに従って、満州の様子を知るようになり、夢と希望がふくらんでいくような気分になって、一日も早く龍爪に行つて、開拓団の一員として地に足を着けた生活をしたという気持ちで固まつてきました。

満州からの便りを読んだり見たりしているうちに、両親たちもだんだんと理解をしてくれるようになり、私の気持ちも、ほっとしていました。

数カ月後に、苗村は家族招致ということで私を迎えに来ました。それを機会に結婚式を挙げることとなり、県庁の担当の方が世話人という形で、村の鎮守様で結婚式を挙げました。

私の、「大陸の花嫁」話が起こり始めたところか

ら、満蒙開拓への興味を持ち始め、それがだんだんと高じて、そのうちにあこがれへと進んでいた第二人も、苗村からくる手紙を読み、そして苗村と対面して満州の話を書くようになる、満蒙開拓への道に自分の進路を決めて、内原の訓練所を志願し、私たちの後継者として進むこととなりました。当時、滋賀県の新聞に、「姉弟で、満蒙開拓の道に一身を捧げる！」という見出しで大々的に書かれたものでした。

二 龍爪開拓団での生活

結婚式を挙げてしばらくは、挨拶回りとか、県庁などでの打合わせ、学校での講演会、そして荷物発送準備などで忙しく過ごしていましたが、いよいよ故郷を出立する日がきました。村始まって以来最初の「満州開拓の花嫁」でしたので、それだけに村民の人々の関心もあって、村挙げて日の丸の小旗を打ち振り、駅のホームでは村長さん以下下の村のお偉方にも総出で見送っていただき、かえってこちらの方がどきまぎしてしまいうくらい盛

大な出発でした。

これで日本とも当分お別れかと思うと、今までの張りつめた気持ちもつい緩んでしまい、涙が止めどもなく流れていました。しかし、一人旅ではなく主人と一緒にの渡満となったので、それだけ心強く、主人がひときわ頼もしく感じられました。

船で日本海を渡り、朝鮮の清津から南満州鉄道の列車で国境を通過して、数日間、満州平野の広大な景色を眺めながらの汽車の旅を続けました。鮮満国境を越えて満州国に入つての第一印象は、その土地の広いこと、見渡す限り平原で、故郷の滋賀では思いもよらないことでした。それともう一つは、思っていた以上に寒気の厳しいことでした。

車窓から眺める景色は、まさに夢に見た以上のもので、「一望千里、とはこんなことを言うのか？　これが大陸なのだなあ！」と、胸がわくわくしていました。

「とうとう満州に来てしまったのだ、もう逆戻りはできないのだ！」と、心の中で覚悟を新たにしました。少しでも早く龍爪に着くことを念じていると、列車の動きにもどこかしきを感じようになつてきました。

龍爪開拓団は、国の大量移民政策による第一年度の募集で結団された開拓団で、近畿、山陰、山陽、中国の各県の出身者で構成され、それぞれの出身県ごとに村（屯）を造っていました。私は当然、滋賀村の一員となりましたが、人数が少なくこぢんまりした村で、その代わりに、一つの家族のように和気あいあいとしていました。お正月や、お盆にはみんなで集まって、ごちそうを作ったり、歌を歌ったりして楽しみました。

満州の春の訪れは遅いが、しかし暖かくなり出すと、一斉に見渡す限りの広野に新芽が吹き出し大草原となり、長く畜舎の中に閉じ込められていた家畜は、放牧されて嬉しそうに草を食べ、大陸ならではの光景となつてきます。やはり満州に来

て良かったと満足はしていましたが、私の想像していた農業とは大変な違いで、農業機械を使つての作業にはまだまだ程遠くて、すべてが悠長でのんびりとしていました。でも、石ころ一つ無い肥沃で広大な土地は日本とは段違いで、何を作つても見事な出来栄えでした。五月下旬から八月にかけて、アヤメ、芍薬^{シヤクヤク}、鈴蘭^{スズラン}、アツモリ草、百合などが一齐に咲き競っていましたし、八月下旬から九月には、キキョウ、オミナエシ、ススキが、山には草がたくさん顔を出します。そうなるのと、「ああ！ ここに来て良かった」と思うようになり、故郷のことは忘れるようになりました。

開拓団生活にもある程度慣れてくると、子供が生まれて我が家もにぎやかになり、つかの間の平和を謳歌していました。昭和十六年の暮れに、大東亜戦争がぼつ発しましたが、龍爪開拓団での生活は、全く変化はありませんでした。しかし昭和十八年ごろから戦局も厳しさを増してきました。新聞やラジオでも内地の様子が伝えられ、ときど

き「大津の家はどうしているかなあ」と、故郷に思いを馳せるようになりましたが、「満州は絶対安心」という信念を持っていました。

三 悲劇の始まり

昭和二十年八月九日の朝、突然に大砲の発射音、引き続いて「ツツー、ドドン！」「ツツー、ドドン！」という不気味にうなる音。何ごとが起きたのかと、びっくり仰天して外に飛び出しました。昨日の夜までは平穩無事で何も連絡を受けていなかったもので、青天の霹靂とはこのことを言うのだろうか、驚きの衝撃で右往左往するばかりでした。夕方になつても大砲の音は止まず、不気味な一日を過ごしていました。夜になつて龍爪開拓団本部から、「今朝何の予告もなく、ソ連軍が国境の各地から戦車を先頭にして、怒涛の如く不法に侵入をして来た。その先頭は林口近くまで来ているから、いつ避難するかもしれないので準備するように」という連絡が入りました。私たちは、ただ、ただ驚くばかりで、どうすればよいのか、

これから何をすべきか、全然判断ができずに呆然としていました。

当時、滋賀村には十二軒の家族がいましたが、男性は九〇%の人が、関東軍根こそぎ動員で、四月から五月にかけて召集されていて不在でした。主人も、五月四日に召集を受けて出征して行きましたが、どこの部隊に入ったのか全然分かりませんでした。村に残っていたのは、老人と、女子供ばかりです。

しばらくして、みんなは我に返り、「これではいけない、何とかしなければ」という思いが出てきて、まずそれぞれ家の中の整理を始めました。だれかの指示で、戸や窓を閉めて開かないように釘で打ち付け、ガラス窓は板で覆いをするなど、防衛対策をしました。そして暗くなってから、各家にある銃を持って交代で村内の警備をしました。

毎日聞いていたラジオのニュースなどで、この戦争の様子もある程度は承知していました。沖縄

もついに占領され、次は九州か、または関東地方に米軍が上陸するのではないかという、うわさも流れていて、大変なことになってきているということは知っていましたが、「何、満州は大丈夫だ。ソ連との間には、『日ソ不可侵条約』が結ばれているのだから、米英軍が満州に攻めて来ることなんか全然考えられない。安心だ!」と考えていただけに、本当にシヨックでした。

ソ連軍の進撃は予想以上に早く、八月十一日になると次のような指示が流れてきました。「情勢はいよいよ切迫してきた。龍爪開拓団ではみんなと行動を共にするので、本部に集結されたい」ということで、いよいよ避難行の開始となりました。一同は驚いて、大急ぎで準備してあった荷物を馬車に積み込みました。長い間、家族同様にあって働いてくれたクローリーも、名残惜しそうな様子で手伝ってくれていましたが、みんなは、「カイプーライ! カイプーライ! (すぐに帰って来てくれ)」と言って涙を流しながら別れを悲

しんでくれました。私たちも、またすぐに戻れるという軽い気持ちでいましたので、いつまでも見送ってくれるクーリーに手を振っていました。しかし、これが最初で最後の別れとなったのです。が、だれも、もう帰れないのだということは考えていませんでした。

一番かわいそうで、後ろ髪を引かれる思いだったのは、家で飼っていた牛三頭、豚六頭、鶏二十羽、それに羊などを、そのままにして来たことです。粒々辛苦の働きの末に、これまでに増やしてきた家畜類です。それこそ毎日毎晩手塩にかけて育てた、私たちの分身でもあったのです。そのうちの羊が、何も知らずに馬車の後から、ちよこちよこしながら付いて来るのでした。なんとも哀れで涙が出てしまいました。

団本部に向かってちよこ半里ばかり行つたところで、ソ連軍の飛行機から機銃掃射を受けました。びゅう、びゅうと不気味な音をたてて耳のそばを飛んで行きました。びっくりして、急いで麦

畑の中に飛び込み、身を小さくしていました。みんなの顔色も蒼白となっています。子供はあまりの事態に驚き、気を失っている者もいました。泣き声も出せなかったようでした。しばらくしてそつと頭を持ち上げて林口街の方を見ると、関東軍関係の家族とか、女子軍属の一団を乗せた列車が走り去るのが見えました。私たちも汽車に乗りたくても乗れずに、歩いて避難しているのと思うと、これが同じ日本人なのかと悔しく思つたものでした。

こんなところにいつまでいても駄目だ、早くここから離れなければと思い、みんなと励まし合つて、団本部に向かって全速で駆けました。途中の島根村にたどり着いたとたんに、「おおい！ おおい！ 後ろからソ連軍の戦車が五十台ぐらいらるぞ！ みんな早く身を隠せ！」とだれかが叫んでいて、私たちは再び恐怖心が体中を走り回り、馬車も荷物もそのままにして、手には何も持たずに傍らの草山に飛び込みました。機銃掃射を受け

たときも気が動転していましたが、今度はそれ以上で、「ここで死ぬのかなあ」という思いが、瞬間体を駆け回り、子供の手を無理矢理引っぱっていました。どのようにしていたかの記憶は全然覚えていません。

あちこちに、ばらばらになって飛び込んだ人たちも、人間の背丈以上に伸びている草の中では、どこにいるのか見当もつきません。子供たちの泣き叫ぶ声のする方に向かって、「おおい、だれだれさん」と呼び合っていました。その呼び合う声で周囲に木霊して不気味な雰囲気となっていました。方向の分からない草むらの中を一里あまり、走っては転び、また起き上がっては走り続けました。何となく、すぐ後ろから戦車が追いかけて来るような錯覚に襲われていました。

しばらく逃げ惑っているうちに、辺りが静かになってきたのでいくらか気持ちも落ち着き、気を取り直して周りを見回したところ、私と子供三人、それに滋賀村で看護婦さんだった人と、ほか

に女性一人が一団となっているのが分かりました。だれも荷物などは持っていないので、まず食べる物に事欠き、これから先どのぐらい歩かなければならないのか分からないので、先行きが思いやられました。

「いつそのこと、死んでしまおうか？」と、だれからと言うことなく口に出てきて、看護婦さんが「私、ここに薬持っている」と言って取り出しました。みんなは黙ってその薬袋を手にとって飲むようにしましたが、そのとき、ふと私は「ここで死ぬのも一つの方法だろうが、こんな異境の地でだれにも知られずに、どこでということも分からない山の中で、命を捨てるのはあまりにも残念だ。たとい草の根、木の皮をしゃぶっても、逃げられるところまで逃げてみたら？ 幸いに、まだ村を出てからそんなに時間も経っていないし、体力もまだあるから、この体力の続くまで南に向かって進んでみよう、そうすれば何か、命の綱が見いだせるのではないか！」と思い、みんなにも

そのことを話し、みんなも我に返り同意してくれました。

気持ちをしつかりと持ったら、不思議に身内に力がみなぎってきて、二歳の健、四歳の敏子を背中にくくり付け、六歳になる満雄の手を引いて山道を歩き出しました。

やっとの思いで団本部に着きましたが、既に本部の大部分の人は出発していませんでした。休む間も無く団本部主力のあとを追ってすぐに歩き始めましたが、方向が違っていたのか、団本部に追い付くことができせん。険しい山道を平均して一日に約五、六里は歩きました。毒ではないかと見紛うような真つ赤な木の実も口に入れましたが毒ではなく安心しました。

途中で、日本兵の一隊を交えた一団と合流し、その人たちに付いていくことになりました。夜は野宿で、蚊がいっぱいいて眠れるどころではありませんでしたが、声を出すことができず蚊に食われるままで一夜を過ごしました。

「こんな有様では、今にソ連兵か、土匪に見付かつて殺されてしまうぞ」ということで、休むこともそこそこにして疲れた体にむち打って、子供を背負い、一人の手を引いて再び歩きだしました。人間は生きんがためには、いざとなるとどんなことでもするもので、畑の中に入っては、なっているスイカやキュウリなどを盗んでは食べて飢えを防いでいました。まず子供に食べさせて、次いでわたしも食べながら歩きました。

夜が明けて日が昇りだしたところに、「明日中に横道オウドウ河子ウカシを渡らなければ、橋は壊されるだろう。みんな、頑張れ。頑張れ。これから駆け足だ。二十里ぐらいあるぞ！」と隊長らしい人が言ったので、私は泣くにも泣けない気持ちになりましたが、このままここで一団と別れてしまつては、それこそ死を待つことしかありませんでしたので、「死んでも、付いて行くぞ！」と、覚悟を決めて一番後ろになって走りました。どうにか足は動いていましたが、苦しくて苦しくて、そして悔し

かったです。手を引いて一緒に走っていた満雄は、もう走ることが苦しくなっていました。私は無理を承知で引きずって走りました。

満雄も弱り切ってしまい泣く力も無くなって、ただ引きずられるままでした。この駆け足移動で、倒れる老人や子供たちが出てきましたが、軍歌の歌詞にある、「泥水すすり草をかみ、荒れた山河を幾千里、よくこそ生きてくださった」の文句以上の苦勞でした。

横道河子が近くなると、明かりが二つ、三つと見えてきました。満人部落らしい。何となくぼつとした気持ちになりましたが、その反面、どんなことになるかという心配もありました。そこに三人の子供とともにたどり着きましたが、部落から三人の白系ロシア人が出て来て、意外にも親切にしてもらい助かりました。本当に嬉しく、神様に助けられたような気持ちになり、それまでの苦しみからほぐれて涙がこぼれ落ちました。

指折り数えてみると、我が家を出てから十二日

目でした。白系ロシア人は、キュウリを三本ずつと、饅頭を食べさせてくれました。有り難いことでした。気持ちもほぐれて少し休んでいたら、一人の男が出て来て、「日本人がこんなところで、うろろうしていると捕まって殺されるよ！早く吉林の方に行きなさい」と、親切にしかも優しく言ってもらいましたが、私はまた今までと同じような避難行を続けなければならぬのかと思うと、もう堪らなくなり、いつそこで死んでしまおうかとも考えてしまいました。だがここで死ぬでは今までの苦勞が何にもならないと、再び気持ちを取り直して、ばんばんにはれ上がっている重い足を引きずりながら、その部落をあとにしました。

子供も歩く力はもう無くなっていましたが、私は「さあ！もう少し歩くとね、とうちゃんのところに行けるよ！頑張ろうね！」と言って、慰めたり励ましたりして力付けましたが、子供も「とうちゃんに会える」という言葉に少しは元氣

を取り戻してました。

それから一団は再び歩き始めましたが、途中で老人四人が行き倒れのようになって死んでしまいい、また山の中では、子供が十人ぐらい、体を並べて殺されているという悲しい場面もありました。同行していた日本兵も段々と離脱していきました。私たち母親が子供を泣かすと、兵隊は「子供なんか捨ててしまえ！」と、犬猫を捨てるのと同じように、全く人情も何も無しに言っていました。どうして、かわいい我が子を殺したり捨てたりすることができるだろうか。窮すれば、人情や情念まで全く無くなってしまうのだろうか？

途中で、草むらの中に首だけ突つ込んで死んでいる男の人を見ると、「もしや、主人では？」と思うと、堪らなくなつてのぞき込みました。年のころ四十歳前後でした。この人にも奥さんや、子供さんがいただろうにと思い、自然に手が合わさってしまいました。

しばらくすると、野良小屋らしきものがあつた

ので、少し休もうと思つて中に入って、びっくりしました。日本兵が銃剣で腹を切つて死んでいたので。生きる望みを失つて死を選んだのでしょうか？ もう少し頑張つて少しでも先に行つていたら、死ななくても済んだかもしれないのと思つたと、哀れを感じましたが、私は、「自分もやがてはこのような運命に見舞われるかもしれないが、倒れてしまうまでは何としても生き続けて、子供たちと共に日本の土を踏むのだ」と、覚悟を新たにしました。

四 生と死のはざまにあつて

逆境に立つと女性の方が強いといわれていますが、本当にそう思いました。私は、これといったものは何も食べておらず、のどが乾くと地べたの水たまりの泥水を啜っていました。大便是血便ばかりでしたが、それでいても呼吸が続いていたのだから、今に思えば不思議なことでした。やはり当時の切羽詰まっていた極限の中での、強い心の持ち方が勝つていたのでしよう。

ここからは川を四つ渡らなければ、この危険地帯を突破することはできませんでした。運命のいたずらか、第一の川を渡る夜は大雨で川は増水していたので、首まで没して渡りましたが、全く必死の思いでした。足元ははずると滑るし、子供は背中に固く結び付けてはいるものの、満雄は抱きかかえるようにして、顔も没するような有様でやっと渡りました。

ここで数人の老人と子供が途中で流されてしまいい、ついに命を失ってしまいました。この渡河での苦しみは、筆舌に尽くしがたいことでした。

八月二十一日。八月十一日に滋賀村を出てから、ちょうど十日が経ちました。計算してみると約二十二里歩いたことになりませんが、川を渡った対岸には、在ハルビン部隊の日本軍が数万人集結していました。日本兵の集つてるところにたどり着き、やれやれという気持ちになりました。通りすがりの日本兵が、私の背中の健を見て、「子供が、ちよつと、おかしいよ!」と言つて注意し

てくれました。私はびっくりして背中から健をおろしてみると、健はもう死んでいました。今まで夢中で歩き続けていた私は、背中の健の異常には全然気が付かなかつたのです。ちよつと油断すると列から離れてしまい、追い付くのに大変だったので歩くことだけに神経が集中していたのです。胸がきゅつとつまつてきました。だが涙も枯れていたのか、そのときは全然流れませんでした。

お乳が一滴も出ないから、赤ん坊は空腹となり死ぬよりほかに生きる道はなかつたのだと、そのころはそんな考えしか思い浮かばずに、精神が錯乱していたとしか思われません。

背中の異変を知らせてくれた日本兵は将校だったし、顔もうつすらと覚えています。とても親切にしてくれて、スコップを持って来て穴を掘り、そこに健をちゃんと埋めて、数人の兵隊さんと共に読経を唱えてくれましたが、その読経を聞いているうちに悲しみが込み上げてきて、初めて涙が流れました。恐らくあの将校さんにも、健と同じ

ぐらゐの年の子供がいたのではないかと、今でも
ご恩を感じています。

ここで数日、収容されて久しぶりに安心して休
むことができました。

再び南下することになり、山の中に入りまし
た。そこでしばらく過ごすために、男手によつて
草小屋が造られて、雨露をしのぎました。食べ物
は現地人が作っている畑から、トウモロコシと
か、アズキなどを盗んできて食べていましたが、
人間は生きるためにはどんなことでもするの
かと、心の中では良心の呵責に責めさいなま
れましたが、行動は反対でした。子供に食べ
させるには、こんなこともしなければならな
かつたのです。昼間は見付かるので、夜明
け方に行くのですが、これがとても恐ろしい
ことでした。

あるときのこと、他の人と少し離れたところ
で一人で、キュウリを盗んでいるときに、不
意に人の話し声が聞こえてきました。まさか、
この夜明けにとちよつと耳を疑いましたが、
まさしく人声

でした。「これはしまった。大変なことにな
つた！」と、慌ててそばの小川に静かに入り
顔だけ出してじつと息を殺していました。秋
口の満州の夜明けはもう寒く、我慢がで
きないくらいに冷えてきました。見付か
れば殺されることは分かっていました。子
供を残して私がここで殺されたらどうなる
のかと考えると、もう少し我慢しようと、
半分気を失うような状態で寒さに耐えて
いました。話し声が段々と近づいてきま
したが、やはりこの畑の主でした。「どう
も、この辺に日本人の匂いがする！」と
言つて歩いてきました。銃を肩にして、
鋭い顔付きで目ばかりがぎよろぎよろ
光つていました。「もう駄目だ！ 殺され
るしか無い」と、一応私も覚悟を決めて
いました。しかし幸いなことに、その川
端に沿つて柳の木が茂つていて、それ
に隠されていた私は見逃されたのでし
た。おおよそ一時間ばかり川に浸かっ
ていて体は冷え切つてしまい、感覚も
無くなつていました。彼らもやはり
気になつて

いたのか、振り返ってはこちらを見ていました。わずかなキュウリ数本を持って子供のもとに帰ることができました。

こんな情けない日が二十日あまり続きました。山に入り木の実を取ったり、食べられそうな草を採ったり、蛇や蛙も食べましたが塩分が取れないので、体の疲れが目立つようになってきました。しかし何でも食べなければ、到底生きてはいけなかったのです。

それから数日経ったある日のことです。やはり食べ物を探しにいつもと違う方向の畑に入りました。辺りはとても静かで、久しぶりに気持ちも落ち着きゆつくりした気分になって、トウモロコシを四つ五つと盗り、今日はこれで生き延びることができると嬉しくなって、さらに盗り続けていました。ふと気が付くと目の前に体の大きな男が二人立ちほだかり、鋭い目付きで私をにらんでいます。全く気が付きませんでした。私は、体中の血がいつべんに逆流してしまったと思うほどびっ

くりして、足もすくんで口もきけなくなっていました。「今度こそ、殺される」と、あきらめの気持ちに先に立ってしまいました。そして、ただ一生懸命に手を合わせて命乞いをしました。相手の男は私をなぐりに掛かりました。

私は、ろくに知らない中国語の単語を並べて、「私には子供が二人います。食べ物が無くて子供も死にそうです。悪いとは知りつつ作物を盗んでいました。助けて下さい！ お願いです。お願いします」という意味のことを訴えました。すると二人は何かひそひそと話していて、一人の男が「子供は、女か男か」と聞いてきました。そして、私に向かって、「裸になれ！」と言いました。私は、「これから殺されるのかな？」と覚悟をしました。「ああ！ 残った子供がかわいそうだ。私が食べ物を持って帰るのを待っているだろうに！」と、心のうちに思っていたら、次いで今度は「主人は今ごろどこでどうしているかしら！」と主人のことが頭に浮かんできて、胸が張り裂ける思いにな

りました。私は意を決して裸になり、二人の男の前に立ちました。二人の男は、にやりと笑いなगर、「これで勘弁してやるから、その代わりに女の子をくれ」と言い出して、私の持っていた時計と、わずかばかりの小銭を取り上げました。彼らはこれで満足したようで、「ここで待っているから、急いで子供を連れて来い」と言ったので、私は思わず、「はい！」と返事をしてしまいました。

大急ぎで山の中に身を隠しました。「ああ！よかった。命が助かった。子供が私の帰りを待っているだろう」と、茨の山道を夢中で走り、やっと小屋までたどり着きましたが、着いた途端に気を失って倒れてしまいました。子供の泣き声で気が戻り、子供に抱きついて泣き伏してしまいました。

また、こんなこともありました。ある日、日本兵が私たちの小屋に逃げ込んで来て「女、子供がどうしてこんなことで生きていかれようか？ 僕はここで先に死にますから、あなた方も、死んだ

方が幸福ですよ！」と言って、私たちに手榴弾を渡し山の中に入って行きました。

このような悲惨なことを繰り返しながら、この小屋での生活が続きましたが、ついにここでの最後の日がやってきました。

その日の真つ昼間、朝鮮人約百人ぐらいが、武装をして小屋に向かって攻めて来ました。小屋には日本人が三十人ばかりで、これでは勝ち目は全然無く、みんな捕まって殺されるしかない、一同は覚悟を決めました。一団の中の郷長らしいのが、「手をあげろ！」とどなっていました。私たちは、男も女もみんな真つ青な顔色になり、ぶるぶると震えながら並びました。郷長らしい人は、「日本は戦争に負けたのだ、随分と畑を荒らしたな、その代わりにどんな目に遭わせるか分からないぞ！ これから我々に付いて村まで来い！」と、大きな声でどなりました。私たちの中には、泣き出す人もいれば、このまま、ここで死のうという人もいましたが、結果的には仕方なく全員連

れて行かれました。

山を降りると、そこに朝鮮部落がありソ連兵の姿も見られました。ソ連兵は随分みすぼらしい姿で、軍服もぼろぼろで乞食の兵隊のようでした。が、私たちを見て、さも嬉しそうに何か話し合っていました。部落では一人一人の身体検査があり、時計やお金やちよつと目に付くものがあると取り上げてしまいました。取る物が無くなると、割とおとなしくなりました。その夜は、そこに泊めてくれました。朝鮮人の一人は、「日本人は、みんな日本に帰れるのだから安心だ。我々はどうなるのか分からない」と言っていました。

翌日、そこを出発し、九月二十日ごろには「拉^ラ口^{コウ}」に到着、ここで収容所に入れられました。ソ連軍からダイズ、トウモロコシ、高粱^{コウリヤン}などのわずかな食糧の配給を受けて、九月二十四日まで過ぎましたが、ここでも日本軍が大勢収容されていて、逐次シベリアの方に連れて行かれるのを見送りました。

十月三日には、一応の目的地である牡丹江^{ポタンコウ}駅に着きました。駅の周辺にも多数の日本兵がいましたが、みんなの顔は明るく、「おおい、みんな内地に帰れるのだ！」とか、「今度こそ本当だ」「かあちゃんや、子供の顔が拝めるぞ！」と口々に喜びを表していました。私たちに対しても、「ここで死んではならないぞ！」「みんな、それ元気を出せ」などと言って私たちを喜ばせました。子供たちに向かつて、「今度こそ日本に帰れるよ。みんなが待っているぞ」と話をする、子供たちも久しぶりの笑顔を見せました。しかし、私たちを喜ばせてくれた兵隊さんたちは、そのまま列車に乗せられ北上して行きました。私たちは反対に、ここからさらに南下するようでした。

十月五日の夜、牡丹江駅から無蓋貨車に乗せられて新京に向かいました。貨車には、女、子供が大部分で男は少ししかいませんでしたが、ぎっしりと詰め込まれて、こぼれ落ちそうな有様でした。駅々で停車すると、ソ連兵が押しかけてき

て、時計などを奪い合つて略奪していましたが、目ぼしい物が無くなると、今度は、女を求めて、引っぱりおろしては無理矢理連れて行つたり、臨月に近い奥さんを押し倒しては、あの大きな革靴でお腹の上を踏みつけていました。悲鳴を上げて泣き叫んでいましたが、どうしようも無く、泣けば余計に面白がつていました。

戦争に負けるということは、斯くも惨めなことであることを実証させられました。私も髪を切つて男装をしていましたが、知人の岡田和子さんは十六歳でしたが、とても美人でしたので男装していてもすぐに分かつてしまいました。ソ連兵が岡田さんを見付けて、「マダム、サンゴ」と言つて引きずりおろそうとしたので、驚いた両親は手を合せて「この子を連れて行くのは止めてくれ、私たちは年寄りだから死んでもいい。この子の代わりに殺してくれ」と涙を流して頼みましたが、聞かばこそ両親を棒で滅多打ちにして、和子さんを引きずつて行きましたが、実に恐ろしく悔

しい場面でした。その後、この両親はこのときのことの原因で奉天（瀋陽）の収容所で亡くなりましたが、本当に気の毒なことでした。こんな悲惨なことを見たり聞いたりして、私たちは本当に生きて祖国の土を踏めるのだろうか、不安な気持ちには増すばかりでした。

一週間かかってやっと十月十二日に新京に着き、大房身の日本陸軍の施設だった収容所に入り、そこから数日してさらに奉天に向かい、十月二十八日に奉天収容所にたどり着きました。

ここでの食糧は粟だけでしたので、みんなはがりがり亡者の如くにやせ衰えて、生きていけそうにもなかつたのですが、子供のことを考えると死ぬこともできませんでした。収容所は、学校の講堂だったので、床はコンクリート敷きで、そこに収容者はずらりと並んで休んでいました。寒さしのぎに、みんなかます吠を腰に巻いていました。私も、弱つた体にむち打つて駅まで拾いに行きました。また、ソ連人の家の残飯を拾つては子供に食べさ

せました。

そのうちに腸チフスが流行して、毎日収容所だけでも百人ぐらいが死んでいましたが、栄養失調になっているので体に抵抗力が無く、かかれば死ぬしかありません。満州の十月末は本格的な冬で寒さが厳しく、夜は吠が布団代わりでしたが、そんな物では寒気を防ぐことは無理で、寒気は骨の髄までしみ込んでいました。

昼間は、虱つぶしが日課となり、ときには炊事場から、ジャガイモの皮などを拾って来ては食べていました。本当に乞食以下の生活です。尾籠なことですが、赤痢にかかると一日に三十回も、四十回も便所に通いましたが、それもみんな血便というより血の汁のようなもので、それが何カ月も続くと、大方の人はそこで死んでしまいます。どの人も骨に皮が付いているという姿となります。頭も狂ってきて朝顔の花のように干からびてしまうのです。滋賀村の人も、ここにきてほとんど死んでしまいました。死者が出ると、現地人が来

て、まとっている衣服をはぎ取り、素っ裸のまま、棒のようになった遺体を、百体ぐらいつ車でどこかに運んで行きました。日本軍の捕虜が掘ったという、四万人ぐらいが入る穴に投げ捨てるのとことでした。今日は自分の番かと思うだけで、何の感傷もわいてきませんでした。

忘れもしない、昭和二十年十一月十日、ついに敏子が栄養失調で、四歳の短い生涯を終え、続いて翌日の十一日には六歳の満雄が凍死で亡くなつてしまいました。私は、自分は食べずとも子供には何とかして食べさせようと努力していましたが、吠一枚の生活では到底この寒さから子供を救うことはできませんでした。お坊さんを世話してもらい、なけなしの所持金二十円を全部出してお経をあげました。実に悲しいことでした。

二人の子供を亡くしたので、私は十二月一日から、中国人の工場に働きに出ることにしました。月給四百円でした。生きていくためには何らかの方法をとらなければなりません。働きに出

る人もあれば、満妾といって現地人の奥さんになる人、女中として中国人の家に行く人など様々でしたが、みんな騙されて行ったのです。その人たちが今どうしているのかと思うだけでも悲しくなってきました。それらの事情の多くの人が、今になつて後悔し日本に帰ろうと思つても、それができない人もたくさんいるのではないかと思ひ、全くお気の毒な話です。

五 やつと帰国できて

奉天の収容所には、昭和二十一年五月十五日までいましたが、いよいよ待ち望んだ引揚げが開始されました。引揚船の入港する葫蘆島コロトクに向かつてだんだんと南下しました。十五日奉天出発、十六日錦県到着、そこで十九日までとどまり、二十日出発、二十五日葫蘆島に到着し、即日懐かしい日本に向かつて出航しました。

航海はおおむね順調で博多港で上陸、消毒、帰国手続きなどを済ませて五月二十八日博多を出発し、無蓋車で門司に着き、門司からやつと客車に

乗ることができ、米原から電車で八日市に向かい、五月三十日、夜八時過ぎに八日市にて下車、知人の家に一泊して、やつと畳の上で足腰を伸ばしました。六月一日にようやく流浪の旅を終えて我が家の敷居をまたぎました。

ともかく私は生きて帰つた。いろいろなことはあつたが、間違いなく生きて帰つて来たのです。それからの人生は、多くの引揚者と同じく、これまた波瀾万丈、困苦欠乏の人生でしたが、どうにか人並みにその苦しみを乗り越えて今日に至りました。思い返せばあの衝撃の日から六十年、世の中は百八十度変わつてしまひ、あの時代の美德は、今日では通用しなくなりました。若い人たちに言わせれば、「自業自得」という心ない答えが返ってくる時代となつてしまいました。

現代の人々の心の中には、もう六十年も前のことなどは、ひとかけらも残っていないのでしょうか？

日本人の半数以上の人は、全く知らない昔話と

しか思っていないのでしょうか。あの苦難な時代を少しでも知っている人の中にも、戦後の「暖衣飽食」「消費は美德」などという物心両面のぜいたくな生活に溺れ込んでしまい、苦しみ、悔しき、つらさ、悲しみなどの人間として固有の情念を、あまり感じなくなってしまう人も多いようです。

だからといって、今の人にあの時代に私たちが体験した苦しみなどを、再び経験させる必要はないでしょう。いや、絶対に経験させてはならないことです。ただ、このような事実があったということ。そして、それを乗り越えて強く、たくましく生きてきた人々がいて、その人々が、今日のこの国の平和と繁栄の基礎を作ってきたのだということだけは、忘れないでもらいたいと念願するばかりです。

朝鮮から渡満した一学徒の顛末

東京都 西脇 章 治

一 学徒動員

私は、大正十五（一九二六）年二月二十三日、大阪で商社マンの子供として生まれた。父の転勤に従って大阪、東京、青森などを転々としていた。小学校四年生の春に朝鮮に渡り清津を経て群山の小学校を卒業し、群山の中学校に入学したが、三年生のときに京城（ソウル）に転居したので、京城の中学校に転校した。このように小学校、中学校は、随分変わったものだった。

昭和十九（一九四四）年の春、上級学校への進学を決めるに際して、私は内地の高等学校を目指していたが、両親は元来あまり頑健でなかった私の体を案じて、食糧事情の良い大陸の学校で勉強することを勧めた。両親の説得により、中国大陸